

白金葎

3月号



平成 30 年 3 月発行 第 8 5 号

定例句会（毎月第三金曜日 原則アビスタ会議室）

四月十五日（日）新宿御苑吟行句会午後一時～四時四谷地域センター

四月二十六日（木）アビスタ第一 兼題…柳絮飛ぶ、石鹼玉

五月十八日（金）正午～三時第四兼題…母の日、松落葉

兼題句参考句四月二十六日分（柳絮飛ぶ、石鹼玉）

ある時は柳絮に濁る山おろし

前田普羅

とつぷりと暮たる空を柳絮飛ぶ

長谷川權

鑑真の船出の運河柳絮飛ぶ

目貫るり子

胴ぶるひして離れたるしゃぼん玉

矢嶋栄子

継ぐ息に歪んでをりぬ石鹼玉

鈴木有差

しゃぼん玉雲を映して子の忌日

樋口芦笛

月例句会報（¹⁸／3／16 10名欠3 鷹鳩に化す、春田）

光成高志

夕日真中に一町の春田哉

鷹鳩と化しひねもす回る山手線

鷹鳩と化し泣く他はなきあの日来る

芸大の校舎の上の春の月

春雷の一喝此の世革まれ

仲本興正

鷹鳩と化して押しゆく三輪車

子にならび光る銀輪春田晴

ものの芽の囃してゐたる扇塚

墓石の空の一字春春日燦

れんげうの黄に染りたる厨窓

増田陽一

老年の歩に接骨木の蕾湧く

暮啼く夜吾にも新境地あれと

鷹雲に紛るる空の鳩羽いろ

春田打つ鋏先逸れて鳴雲雀

早春の弦楽裸腕ほぼ直角

松村幸一

水張つてさざなみひろぐ春田かな

雛段が聞いてゐたりし娑婆苦かな

鷹たりし日を恋うて鳩眠るかな

存命者何名小学卒業写真

骨壺の妻と聞きをり春の雨

鷹鳩と化し公園に長居せり

雛の部屋小町の軸も拝見す

啓蟄の井戸に呼び水入れて押す

煙立つ遠き春田に人の影

春田中鴉のボスの来てをりぬ

朝毎の薬の水も春の水

啓蟄や居すはつてあるふさぎ虫

春田打つ若き農婦を車窓より

鷹化して鳩となるとや我もまた

春風や外出はいつも医者通ひ

土竜穴踏まで崩るる春田かな

伏せありし大甕に日や紅椿（日本民芸館）

雛飾る畳つめたき資料館

干魚に酒注ぎゐる春の風邪

光 みち

つねづねにひとりの夕餉春の星

雛納む目かくし髪を整えて

車窓から春田のつづく夫婦旅

「ありがとう・さようなら」歌い卒園す

迫りくる都会の住い春田かな

鷹鳩に化して会いたい顔うかぶ

吉羽多美子

連嶺に白馬駆けて春田打つ

をとめ子の髪匂ひ立つ春陽かな

万作の花に頬寄せ道祖神

室外器音高まれば雪霏々と

天空を雪崩落ちたり糸桜

倉田紀子

鷹鳩となりマラソンの橋袂

げんげ田の田毎の畦を遠回り

春田一つ挟みて鎮守と教会と

観音の鳩とし下れ手負鷹

浅野正美

武者昭七

飯田孝三

鷹鳩となり考へる人の前

山の根の水流れ入る春田かな

鷹化した鳩のごとくに背を伸ばす

鷹化した野鳩ベンチの前歩む

田を打ちて水口光る日永かな

啓蟄や山菜萸の花を過ぎるもの

田宮敦子

啓蟄やたまには外に出てみんな

鷹鳩と化し川は音たて流れをり

春の雲白線流し見る様に

春灯パズルの答え解けぬまま

猫共も遠出するなり春田かな

佐藤宏之助

くくくくと甘え鳴きして蟾蜍つるむ

睡蓮のうすくれなゐの巻葉かな

啓蟄のその魁は団子虫

磯目健二

春田打ついまもんへは紺紺

塔に背を向けて大和の春田打つ

一句鑑賞

光成高志

山の根の水流れ入る春田かな

健二

静かな春田の情景です。信州松川町で又越後の六日町で見た風景を思い出します。静かな農村の佇まいと言つてしまえばそれだけかと思われましようが、その田を開墾した昔の人々の労苦を思わずにいられません。只今、もう一つ思い出しました。福島県の湯岐温泉近くの山間の春田もこうでありました。いずれも懐かしい。

水張つてさざなみひろぐ春田かな

幸一

これは代田になる直前の春田です。我が家前方の手賀田圃でも見られます。強風のよくある仲春の下総の春田といつてもいいでしょう。一か月余り先に来る田植の準備が始まっているのです。風が来て水面を漣がさあーつと広がる春田を諷詠して臨場感があります。即ち生活感。「ありがとう・さようなら」歌い卒園す 正美

卒園式の最後に皆で歌う「ありがとう」と「さようなら」を詠つてあります。ユーチューブで聞いてみました。お母さん方が皆ビデオカメラを構えて感涙にむせんできます。私の子の時は「思い出のアルバム」でした。

一句鑑賞

磯目健二

鷹鳩となり考へる人の前

孝二

ロダンの「考へる人」は、上野の西洋美術館の前庭にある。沈思黙考する青年の像は、同じ青銅の地獄の門を背にして西洋古典世界の雰囲気を醸している。そこに立った作者は、足元で餌を啄む鳩が鷹の化身のように、一瞬幻視したのである。重厚なブロンズ像と身軽な野鳥の取り合わせの奇抜さと滑稽味。

啓蟄や居すはつてゐるふさぎ虫

多美子

啓蟄は非人間的自然現象の季語だが、本句の視線は人間の内なる心へ向いている。陽気に誘われ物みな外へ浮かれ出る季節が到来したのに、どうしてか鬱屈が胸に根を下ろして心が晴れない。春が来ても、家持の歌のように人は「心かなしもひとりし思へば」という自閉的な哀愁にとらわれてしまうことが屢々ある。

連嶺に白馬駈けて春田打つ

昭七

早春、白馬岳に雪解けで馬の形の山肌が出現し麓では代掻き馬とよび苗代準備の目安とした。雄大なアルプスと安曇野の春の風景だ。「連嶺」の使用例には伊東静雄の詩「曠野の歌」冒頭に、「わが死せむ日のために連嶺の夢想よ！ 汝が白雪を消さずあれ」という詩句がある

ことを作者が披露。

水張つてささなみひろく春田かな

幸一

田打ちを終えて満々と水を引き入れた水田を、春疾風とはいえないまでもかなり強い春風が吹く。広々と広がる田面に小波が拡がり、吹き渡る風脚が目にあざやかだ。代田前の準備を終えた、早春の田園風景である。

春田一つ挟みて鎮守と教会と

孝三

相對峙する丘陵の間は一枚の春田という見慣れた谷津の景觀。一方の丘には鎮守の森が、反対側には木の間に隠れに教会の尖塔が望まれる。鎮守は古く地元が祖霊・地霊を祀ってきたもの。教会は近代、キリスト信仰と西洋文化流入の拠点となってきた。祭礼には社から神樂が、クリスマスに教会から聖歌が流れる。ふだん気づかないが、よく見ると、和と洋、古代と近代、農村と都市、多神教と一神教、陰と陽など多くの対立因子が融合調和して今の日本の風景を作っているのである。

鷹たりし日を恋うて鳩眠るかな

幸一

春が兆すと猛々しい鷹も温和な鳩に化すという季語は、冬を鷹に春を鳩に隱喩する中国詩の季節感が土台にある。人生山あり谷あり、不遇には雌伏して捲土重来を期す処世の姿勢に隱喩を重ねることもできるし、一陽来復も意味しよう。さらに、もうひと山花を咲かすのは断

念、春眠を楽しむ鳩にただ良き昔日を追想する自分を投影することもできるだろう。

一句鑑賞

増田陽一

鷹鳩と化しひねもす回る山手線

高志

難しい兼題。「春季」とされる由来も知らないけれど、まあ、「春は眠くなる」とも言うし、掲句での取り合わせが秀逸で、「ひねもす」の措辞が蕪村の「のたりのたり哉」を直ちに連想させるところ、春の海と山手線の違いはあれ、春眠の座席に凭れて一周したくなります。鷹化して鳩となるとや我もまた

多美子

青春時の冒険心、壮年時の表現意欲も半ば失せ、歳とともに次第に平静で温和な日常に埋没するようになるのか、と言うのがこの季題の意か、果して自分もそうであろうか? 「なるとや」に「否」という含みのあるところ、同感を誘う句境であります。

鷹鳩となりマラソンの橋袂

孝三

橋の袂に鳩が群がるのは東京マラソンのコースに違いない。選手達がみな高揚した競争心を抑え前途の長距離を計って自制している状態：などと理屈は余計として、盛んな大会に、鳩と橋袂の光景が絶妙であります。

春田中鴉のボスの来てをりぬ

みち

青草の萌えだした田圃に降りた真っ黒けの鴉は良く目立つ。鴉はさしあたり天敵が居ないので概ねボス貌をしているけれど、春だから恋鴉の示威行動でもあろうか。印象鮮明な佳句でありましょう

骨壺の妻と聞きをり春の雨

幸一

先に奥様を亡くされて間もない春である。「骨壺」には重い感慨があり、筆者など身につまされる思いなのだけれど、句調は不思議に安らかで完成されている。救いのように静かな春の雨が降る庭の前に・・・。

一句鑑賞

武者昭七

啓蟄や居すはっているふさぎ虫

多美子

地中に身をかがめてじっと耐えていた虫たちもそろそろ這いだす季節だというに、なんとまだ居座っているふさぎ虫もいるよ。居座っているのは虫か、ご自分か。

春雷の一喝此の世革まれ

高志

鳴り響く春雷を現代政治や生活への天帝の一喝ととらえた。自然現象の奥に人間どもへの戒めや警告やらを感じ取りながら僕らの先祖は暮らしてきた。今もそんな自然への畏敬の念は生きている。もちろん一喝は作者の

一喝でもある。

山の根の水流れ入る春田かな

健二

水張ってさざなみひろぐ春田かな

幸一

「山の根」は張り出した山の尾根などのこと。田植に備えて水田に水をひきいれていっているのだが、水がおのずから流れだし水田に注ぎ込むごとく言っている点に動き出した季節のけはいをとらえている。天気生動の季節である。二句目。「ひろぐ」は拡がること。春風が開けた水田をわたり、さざ波がきらきらとひかりながらそれを追う。ともになつかしい田園風景。一仕事終えた安らぎもある。雛納む目かくし髪を整えて

正美

来年の雛祭りまでしばしの別れ。目隠しをして髪をきちんと整えて箱に収める。ひとつの季節が終わるさびしさがある。

鷹鳩と化して押しゆく三輪車

興正

鷹鳩と化し公園に長居せり

みち

おもしろい季題だけれど本来は暦の上の季節の区切りをいうようだ。それを人事によりかえている。かつての俊敏な鷹も年老いて今は三輪車を押していく身であったり公園でゆつたりと陽を浴びる身であったり。

一句鑑賞

飯田幸三

鷹鳩に化して会いたい顔つかふ

正美

春は物を思う時。「秋思」の内向き思考に対し、「春愁」は人との縁に思いを巡らす。「人恋し火点し頃をさくらちる」(白雄)「さまざまの事思ひ出す桜かな」(芭蕉)。偶々桜を引いたが、人を恋うのはなにも桜時に限らない。骨壺の妻と聞きをり春の雨

幸一

長年連れ添われた夫人の七七忌を間近にした作だろう。一読、冒頭の「骨壺」が目に入る。その存在感が場を占める。「骨壺の」、「春の雨」を始めとする才母音三疊の韻きに尽し難い思いが籠る。才音の響きは物・心のある塊を印象づけるとのこと(「日本語の深層」熊倉十之)。過ぎし鶯の日々を今更に諾うかのようにである。「春の雨」がしんみりと動かない。

山の根の水流れ入る春田かな

健二

山国は春の狭田の風景が目飛び込んでくる。一理想起されたのは、万葉秀歌「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも」(志貴皇子)。岩根を奔り入る水音が聞え、春田のきらめきが目に映る。待ちに待った春の到来である。農始めも間近だ。

鷹鳩と化して押しゆく三輪車

興正

鷹鳩と化し公園に長居せり

みち

共に仲春の身辺詠。(前)これも公園だろう。「三輪車」

は戦後、昭和の一時期に流行した手押式、押してゆく足取りが見えてうららか。のつかかる幼児はうとうと。「三輪車」の具象が目に見せて余すない。(後「長居せり」の屈託なさがとつぷり浸った春気を吹っ切つてやれやれ、さてこれから。「せり」の切り上げが鮮やかに行為の視覚化に成功。

俳窓評論纂

*陽一さん宅を訪ねてITの接続とメール開通を手伝った。その際、いくつかの冊子を頂いた。それは以前この欄で紹介した蝶紀行のいくつかであった。蝶を採集するために南洋の島やタイ北部の山地、それに日本では沖縄・八重山、北海道の東を車で移動しながら蝶を採るその紀行文である。紀行と題してあるように単なる記録ではない。大袈裟に言うくと、曾良の随行日記と奥の細道を併せたような文章です。芭蕉のように推敲を重ねた名文ではないが、読みやすい文章であり、私は病院の行き帰りにほぼ全部読んだ。旅を客観描写しており、読者は自ずとその場にいるが如き錯覚におそわれる。時にくすつと、そう莞爾として先を読むエンジンが働くようなユーモアの漂う逸事が嵌め込まれている。これは軽みに通じる道である。陽一さんは複眼的思考が出来る文士ではない

からうか。ここで先輩を評価してはいけませんが、悦子夫人との俳縁もあった私はそう思つてここに改めてそう書いた次第。悦子夫人の仏壇に飾つてある写真はその紀行時のものもあり私は懐かしく拝見しました。文中に蝶の名前が頻繁に出てそれを採られた喜びが紙背から立ち上がる。原文に触れなければわからないことだけれど、私は不意に芭蕉の名古屋での「狂句木枯らしの身は竹齋に似たる哉」と興じたその心に触れた思いがした。標本箱を開いて見る蝶も美しいが、現場でそれを見て得たその美しさが遠慮がちに書かれてあるのは、十分理解できる。造花の最たるものを追っかけまわしてここまで来たのだ、そういう己に興じて網を振る陽一さんはこの時の芭蕉の心境ではないかと思つた。もつとも、陽一さんは意識されなかったでしょうが。健二さんに一冊回したので彼の書評が得られるかもしれない。

*二月二十日に金子兜太さんの逝去が報じられ、朝日にも追悼文が沢山掲載された。天声人語、文化文芸欄、三面記事と。ここ二十年間の朝日俳壇の選者室での印象を長谷川權が、評伝を担当記者がそれぞれ書いている。引用俳句は〈水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る〉(曼珠沙華どれも腹出し秩父の子)〈原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ〉權は〈青年鹿を愛せり嵐の斜面にて〉(よく眠

る夢の枯野が青むまで」三日月がめそめそというコメの飯」(湾曲し火傷し爆心地のマラソン)を挙げて目指したものを推測している。私は平成元年から数年石井き一さんの勧めで朝日俳壇、東京俳壇に投句したことがある。誓子先生の選を受けるためであったが、時折他の選者の選に入ることがあった。金子兜太(敬称略)もその一人で三年には(若者の両手が林檎割らんとす)が兜太の二席に載り選評を貰った。みちさんも毎日全国俳句大会に(猫が来て飾る雛を転がせり)が兜太特選になった。その頃から、福岡マラソンの日に真栄寺に講演に来られるようになり、二人で毎年一番前で拝聴した。ここ数年は白金霞もお渡しした。齋藤嘉久さんが檀家総代で湖畔吟の選者であり、兜太と交誼があったからである。薄い冊子なので、こりやあどうも、と云ってズボンのポケットに丸め込められたが、読まれてはいなかったようだ。五周年記念号は分厚いので手に提げて壇上をさがられた。一茶がお好きなようで一茶の評伝を何回も話された。ここでメモから紹介するのも読者の退屈を誘うであろうから、何回かの講演中に出て来た人物名のみ下に記す。文挾夫佐恵、石原八束、一茶、村上護、山頭火、夏目成美、芭蕉、リルケ、李白、放哉、山尾三省、夏目漱石、加藤周一、宗左近、多田富雄、本居宣長、RH、ブライス、宮

沢賢治、親鸞、虚子、水原秋桜子、出沢三太郎、趙子昂、藤田東湖などであった。ブライスは幽かに記憶があった。ソローの日記の撰集のイントロダクションをブライ스가書いていたのだ。私が大学一年の教養部の時の英語のリーダーであった。初めて難しい英語に出会った。その箴言的言い回しが私には日本的に思えた。皆忘れてしまっただが、一つだけいつまでも心に残った文がある。段々脱線しそうなので、兜太さんの冥福を祈ってお終いにする。(ここ三年間は今話しておかなければ埋もれてしまうと言われてトラック島の戦争体験を話された。トラック島は珊瑚環礁で確か陽一さんの紀行にもあった青い同心円の宝石のように見える島嶼である。私のいとこ、またいとこの父上が戦死した。パプアニューギニア周りの島々の北、陽一さんのスラウエツシ島の遥か東の海にある。)

* 3.18 朝日の書評欄に嵐山光三郎の金子兜太の生き方が載った。二〇二二年兜太 92 歳の主宰誌五十周年祝賀会のスピーチの要約を出だしに、他界、小林一茶、俳句入門の紹介文。脳天や雨がとび込む水の音(二〇〇八)でノウテンという言葉の響きに雨が降り落ちる音が重なっている。芭蕉の言霊が天から降ってきた。右三行で切っている。(權が引用した、よく眠る夢の枯野が青むまで、もこの脳天の句も、また私が聞いた、古池や蛙飛びこみ複雑骨折 もみな芭

蕉の句を揶揄っている句だ。何故なら、四十代のくせに翁とか言っちゃってと私の前で芭蕉を今の感覚で揶揄した言葉を聞いたことがあるからである。ここが山口誓子先生と根が違ふところである。それを強く思った覚えがある。)

*右9ポで遠慮がちにコメントした翌日の朝日俳壇を開いたら、兜太の追悼句が沢山載っていた。権氏は十三句中十句を選んでゐる。歌壇の方も十句選されてゐる。大串章選の「梅の下兜太の青鯨集まれり」は真栄寺の句碑の梅と思えばいいのだが、これはトラツク島の思い出から作られたのであつて決して荒唐無稽な句ではない。描写からイメージへ作句のエネルギを凝縮させる兜太流に言うとスサノ才型の句である。

健二エッセイ

磯目健二

(一)

版画家陽一さんは、先に奥本大三郎の完訳版ファーブル昆虫記出版記念会に招かれているが、昆虫採集でも国内で知られた人だ。陽一さんが夫人と長い捕虫網を担いで空路タイへ蝶採集ツアーに出かけたときの紀行文を、主宰に頂戴して読んだ。ツアーは悦子夫人が健在の三十年前のことで文章も当時のものだが、描かれたタイ奥地の自然の豊かさとそれに順応した現地生活は驚くべき

ものだった。さまざまな美蝶がそこに乱舞し、蜜蜂まで恐れ気無く陽一さんの腕に張り付いて汗を舐める。ジャスミンの花飾りの濃厚な香りにうつとりする。地元民の純朴な好意に逆らえずに濁った生水を御馳走になったが、そのあと罹病を恐れて抗生物質入手に奔走する。たしか悦子夫人は専門の薬剤師、心配はそれこそ真剣だったであろう。手中の蝶を生きたままに自然へ戻してやると大きな仏恩に浴せると、観光客に蝶を売る少年達の姿に日本の放生会に似たものを感じ、タイも日本と同じ仏教国と再認識する。最奥地で遂に珍品の蝶を採って念願を達成し大満悦の陽一さん。その姿に、私は若い頃、北杜夫の「谿間にて」を初めて読んだときの感動を思い出し感動が甦った。世界で六頭しか採れてない幻の蝶フトアゲハを採った男のドラマと感性溢れる精緻な自然描写は、異色の新作家北杜夫登場を強く印象づけた。近年東南アジアの経済発展がめざましい。陽一さんが描いた三十年前の、昆虫天国のようなタイは現在どうなっているか。幼少時の故郷が高度成長期以降に、全く異郷へ変貌してしまった私の痛切な思いが重なる気がして仕方ないのだが。

(二)

松村幸一さんに旧知の黒田杏子さんから久しぶりに電

話がかかって、昔同じ結社で研鑽を積んだ頃の思い出話やら近況まで積もる話の長電話となった。それに触発されて幸一さんが書いた文章が黒田さん主宰の結社誌に掲載され、私も読ませていただいた。お二人の友情の篤さと、俳歴の長い道程が如実に浮かびあがって感動した。

黒田杏子は、東京女子大の学生るとき俳句の指導を山口青邨に受け、青邨主宰の「夏草」に入会、青邨没後「藍生」を創刊、主宰している。青邨の愛弟子で師風を受け継ぎ、現代的有季平明派であるが、前衛派金子兜太ともウマが合い、共編・対談・吟行なども共にしている。彼女にはそんな幅広さがある。余談だが私は知性的で名利に恬淡な青邨を好きである。幸一さんは源氏物語を、長塚節「土」とともに生涯の愛読書としている。幸一さんはときに其角、万太郎に一脈通じる江戸っ子らしい洒脱な句も披露するが、古典中の古典源氏物語の大の愛好家というのが面白い。黒田に劣らず懐の深い人なのである。源氏物語といえば、評判を賑わした現代語訳の瀬戸内寂聴。最近作「こころ」がベストセラーになっている。同じくベストセラー「九十歳。何がめでたい」の佐藤愛子との対談を雑誌で読んだ。二人とも幸一さん同様九十歳代だが、元氣澆刺、まさに話題縦横だ。佐藤愛子は、子規と親しい俳人で小説家の佐藤紅緑の娘。サトウハチロ

一の妹でもある。その対談で瀬戸内寂聴は、東京女子大後輩の黒田杏子に励まされ本格的に句作を始めたと言っている。黒田自身足繁く京都嵯峨野の寂庵に通っていたらしい。寂聴は第一句集「ひとり」を昨年刊行した。出版は深夜叢書社。氣に入った著者の本しか出さない小出版社だ。社主斎藤慎爾は、寺山修司と併称された気鋭の俳人だったが、現在は自由な立場からの俳句はむしろん文学、音楽など幅広い評論でも知られる。寂聴に懇望されたとはいえ、その斎藤が出したのだから立派な句集にちがいない。寂聴作品では小説より人物評伝が私は好きだが、余談ながらその人物評伝で寂聴以上に感心するのは吉屋信子。惚れ惚れする達意の美文で、俳句も達人で死後句集が出版されている。寂聴の人物評伝の場合、その人間を眼前に見るごとくりアルに描きだす観察眼の冴えというものは神の眼にも喩えなくなるほどだ。人物の胸奥へまで肉迫するが筆致は暖かい。深い省察、共感、同情が根底にあつて読者をほっとさせる。意地の悪さや暗さが無い。極端な言い方だが、無私の視点あるいは子供のような明朗な好奇心と言ったらいいか。そこから出発している。それは地獄を見てきた人間に初めて可能なことかも知れない。瀬戸内晴美が乳児を捨てて出奔し、波乱に満ちた小説家稼業に身を投じて、遂に文学・宗教

で瀬戸内寂聴として大成を遂げてゆく道程において味わった孤独の深さを示すような句が句集「ひとり」にある。

子を捨てしわれに母の日喪のごとく

仮の世の修羅書きすすむ霜夜かな

幸一さんの文章に触発され、黒田杏子、瀬戸内寂聴、

吉屋信子などにさまざまな思いをはせたが、何十回となく源氏物語を読了したという幸一さんに比べて、まだ一回も読了していない自分が、あらためて念頭に浮かんできて、恥ずかしくなってきたのであった。(317)

受贈誌(平成30年三月号)

火の山の天とよもして春北風(彩139号) 平野ひろし

春水となる堰落ちて堰落ちて(〃)

杉花粉秋葉天狗が扇ぎしか(〃)

なめらかな種にも枇杷の香ほのか(〃)

土埃蒔蕪芋を干をれば(〃)

着ぶくれて介護する吾される夫(〃)

長屋門左右ぐるりに干大根(〃)

冬耕のマシーン野鳥を引き連れて(〃)

板碑には梵字大小轉れり(東京ク3月)

口蓮の池の奥より残り鴨(〃)

消防車立ち寄る給油所春の夕(〃)

〃

〃

柴崎貞夫

村瀬米子

篠崎美津江

三田村清子

横川 正

万世遊

理佳江

守啓

山肌の色を変へゆく雪解水(〃)

春袷裾短めにして素顔(〃)

たつぷりと浅漬け盛りし柿右衛門(あすか三月号)山尾かづひろ 瑠子 栄

山尾かづひろ吟行ノート(H 2.3)

冴返る鰯の頭落とすとき

立春の白鳥ぐいぐい寄って来る

万太郎踏みし石段梅明り

〃(H 3.3)

御右手延べまして満々春の水

見るだけの尾頭付の鰯かな

日向水木薔は蛩群るゝ如

賢治童話 淋しい家族

武者昭七

ジョバンニの父親はどこでなにをしているのだろう。

カンパネラの父親は息子の遭難の現場に立つてなぜあんなに冷静でいられるのだろう。そんな疑問を僕は「銀

河鉄道」を読むたびにもつ。ジョバンニの口から洩れてくる情報を総合すると父親の姿は以下のようになる。

荒い北の海で漁業に従事しているらしい。氷山の流れる

北の果ての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水

やばげしい寒さとたたかって一生懸命はたらいっているひ

と、それがジョバンニのえがく父親像なのだ。今年は北

の漁業はたいへんよかったと新聞にあるから父親も間もなく帰ってくるだろうとジョバンニはいう。しかし母親はそれに疑問をなげかける。なにが事件があつて監獄にはいつているかもしれないというのだ。ジョバンニはそれでもかつて父親が蟹やトナカイの角を標本として学校に寄贈してくれたことをあげて、父親が悪いことをするはずがないと言い張る。それにこの次はラッコの上着をジョバンニに買つてくると約束もした。友達はそのをもちだしてジョバンニをからかい悲しませる。そんなふうにはジョバンニの家族の間で父親の存在はおおきく揺れ動いている。ジョバンニはその間に宙づりなのだ。ジョバンニの父親とカンパネルラの父親は幼い時からの親しいなかでジョバンニの父親はジョバンニを連れてはよくその家を訪ねた。しかしいまはその関係はさだかではない。一方は博士と呼ばれ一方は北の海に働く漁師である。カンパネルラが川にはまったとき岸に立った博士はもう駄目です。四十五分立ちましたからと冷然と言ったきり話題をジョバンニの父親の便りに切り替えてしまふ。おといげんきな便りがあつたからもうじき帰るだろうというのだ。ジョバンニをばげますつもりだろうか。母親はどこにいいのか姿を見せない。天上の石炭袋の近く、きれいな草原で見かけた女性に「あれはぼくのおかあさん

だ」とカンパネルラは思わず叫ぶ。「銀河鉄道の夜」は宙づりにされた淋しい少年たちの物語だ。

芭蕉のかるみ以後 (41)

光成高志

栗と呼ぶ一書、其味四あり。李杜が心酒を嘗めて、寒山の法粥を啜る。これによつて其句、見るに遙かにして、聞くに遠し。侘と風雅のその生ツネにあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗ムシクヒグリなり。恋の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄金、鍔ツル二小紫。上陽人の閨の中には、衣桁に薦のかゝるまでなり。下の品には眉まゆごもり親ぞひの娘、娶姑ヨメシユウトメのたけき争ひをあつかふ。寺の児こも、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を仮名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其後震動虚実をわかつた。宝の鼎カナエに句を煉つて、竜の泉に文字を治キタふ。是れ必ず他のたからにあらず、汝が宝にして後の盗人を待て。

天和三年癸亥年仲夏日 芭蕉洞桃青鼓舞書

『虚栗』という撰集には四つの味がある。まず李白・杜甫の詩心の味わいであり、第三は寒山の禅味である。第四は西行の山家を訪ねて人の拾はぬ虫食い栗である。昔は西施の振袖の顔、今は黄金は小紫に鑄るのだ。上陽人という楊貴妃のために閨には薦がかかるまでなつた多く

の不遇な女性がいたし、下品^{ほん}では蚕が繭に籠^{かこ}っているが如き親添いの娘、嫁姑の猛き争いを扱う。寺の稚児、歌や舞の若衆の情けをも捨てず、白楽天の歌を仮名にやつて初学の人の便りにならんとす。其の後震動虚実を分かつたず、宝の鼎に句を煉り、竜の泉に文字を鍛える。

これ必ず他人の宝にあらず、汝の宝にして後の人が盗む程のものになる。こういうふうに訳してみたが、やはり現代感覚では読みにくい文章である。源氏物語を今の感覚で読んで皆往生するのに似ている。要するに、虚栗の味わいは、李白・杜甫・寒山・西行・白楽天という当時の芭蕉の敬愛していた和漢の偉大な詩人たちのそれぞれを持ち味を生かしたものだといふのだ。言ってみれば、自分で発明した味わいではないという事を語っているに等しい。その証拠にその年の九月に山口素堂及び門人たちの発企で旧庵の焼跡に落成した新庵に移った時の句に霰聞くや此身はもとの古柏

があり、これは自分は元の古柏だと言っている句だからである。これは健二さんに貰った暉峻康隆著の「芭蕉の俳諧」(上)に述べられてある。私も同感であるからここに書いた。このような心境に居た芭蕉の深川隠棲からの俳壇の状況を目黒野鳥編の芭蕉翁編年誌(昭和三十三年)から急ぎ事実を書いて芭蕉の立場を見ておこう。

お便り広場(到着順、敬称略)

メール有難う!後半疲れたけど大丈夫だったよ。東京マラソンはやっぱり世界規模の大会で、規模と人の多さは物凄い立派な大会でした。都庁ー日本橋ー雷門ー両国通って門前仲町で折り返して、銀座通りで銀座4丁目を右折し、日比谷通りを南下して増上寺を右手に見て更に南下し、品川で折り返して、最後は丸の内の仲町通りで東京駅を背にゴール!コースとしては都内観光してるみたいだった。自分が過去通った学校やら会社を見ながら色々想い出しながら走ってました。総じて、楽しみながら頑張った大会でした。(225 拓也)

白金霞2月号拝受いたしました。また、例会一覧表ありがとうございます。句会の雰囲気があつていいですね。もしご無理でなければ、一覧表コピーを欠席投句者に送ることができれば喜ばれると思います。4月の吟行句会楽しみにしております。ではまた。とりあえずお礼まで。

(226 興正)

久々の雨で降り足りないと思いつつも椿のつぼみは赤くなり、地を見ればムスカリの紫が眼につきこうなると待っていた春は加速するのだと感じております。二月号の表紙の白金霞、お台場のものの由、いゝ感じで育つて

いるのですね。植物やその写真や句会などで「待春」と云うのは何と良い季語かと楽しんでいけば国会の論戦、戦争を知る俳人の一人も逝去好感度一〇〇%の俳優の急逝などに加え、至近距離で昼火事があり一棟見る見る中に全焼しました。一日として同じ日は無く、生きていればこの見聞も話題も当然と云えば当然ながらあるものだと怠け心に少々元気が出ました。芭蕉の軽み以後(40)基角の「下司后」とか「西瓜を綾に包む」に基角は伊達好みで軽みには縁なき衆生と云うのを見たことがあるので興味を引かれました。基角は出自が下層ではないと云うこともあり、私のかゝわった人達の中でも誰かを「下司い」と人を評価する人もあり、私の祖母は嘉永の生まれで旗本の娘であつたので西瓜は車力、臥煙の食物と云つて母にも食べさせなかつたので母は西瓜は食べずがらいでした。そんな理由で基角のこの歌仙解る気がしました。車力、臥煙、立ちん坊などの言葉、田夫、野人、これも私の子供の頃家の中でよく聞きました。大方、上から目線で下層をケイベツして云つたのでしょうか。祖母は礼儀正しく立派な人でした。余計なこと申し上げました。お便り広場への掲載はNGに。ご自愛ご健吟を願っております。アカギレの指痛く字を書くのが大変です。失礼を。二月二十四日

長屋璃子

(軽み以後(40)は初稿を載せてしまいました。推敲して璃子さんのご祖母様のこと、右の内容を一寸コメントしていたのですが、悩んだ末カットしたものです。又手紙に書かれたのに勇気をもらい、今は載せればよかったと悔いております。芭蕉基角の両吟歌仙は天和二年のこと、嘉永生まれの璃子さんのご祖母様を通じて大正昭和平成と今の世に伝わったという事で、決して芭蕉と白金殿が無縁ではないということ、これ私にはうれしいことです。)

春一番が吹いてから久しいのに、暑いと思う日もあれば、寒い日ありで多かれ少なかれ毎日同じようなことを春は繰り返しますね。会報とも云えぬ手書き、それなりに時間を取られて吟行など遠い昔のこととなりましたが、近くの神社の河津桜がこの紙の如き色でそれはそれは美しく長持ち、楽しんでおります。「我孫子の春」どんなでしょうか。お大切にお過ごし下さいませ。

光成高志さま、みちさま

3/12 璃子

二月廿一日、車の横転事故に遭つて右腕の骨を折つてしまい、あびこ病院に一週間入院、髓内釘とスクリューで骨を固定する手術をしました。もう退院して抜糸もすみました。窮屈なバストバンドやホータイから解放されるのは今月末あたり。骨は折つても命がのこつて又皆さんにお目にかかれるのは倅です。

3/12 幸一

前略P.C練習中につき時間がかかりますので、とりあ

えずコピーだけ送ります。よろしく願います。頑張ります。
草々 (318 昭七)

さて、アナログ人間の苦闘。作りかけた文を途中で休止。したら何回も消えてしまい、そのたび作り直すこと三度。Eメールとやら無事に着きましたかどうか。

○着かなかったたようですね。今、酔っ払っているので電話では理解不可能。SU も怪しい。最後の手段は紙で明朝送ります。たいした文ではないから載せなくてもかまいません。(320 夜 陽二) (朝着信 ファイル添付メールはお教えに参りますのでご安心を。高志)

我孫子日記

2/16	例会
2/17	* 本マルシェ
2/20	野田源氏
2/21	SOA
2/24	陽一宅
2/27	*2 北総病院
2/28	SOA
3/2	*3 書道美術館
3/6	*4 北総病院
3/7	SOA
3/14	SOA
3/16	例会

*ギヤルの列橋ケンチ待つてをり

*2 病院の春の鶉のよく馴れて

*3 桜の花咲く書道美術館

車寄せの古木桜の芽ふくらむ

*4 鷹鳩と化し大病院の人通り

春の田やソーラーパネル線路間

高志

〃 〃 〃 〃 〃

編集後記

今月も大急ぎで編集発行しました。メールにて入稿が出来ましたのでスピードアップできました。そんなに急いでお主どこへゆくと云われそうですが、毎日々々予定があがってきて春からは特に時間の貴重さが身に沁みてわかって来ました。来月からは電子データでもって入稿下さい。俳句・手紙以外は私が入力することはしないことにします。このことよろしくお願い致します。よくよくこのこと念頭にお入れ下さい。お便りは今まで通りをお願いします。私は十代からこれを思いこれをお願いこれを通して通ぜずんば鬼神自ずからこれを通ぜんとすという事がほんとだなあと最近わかって来ましたので、自分の心のままに右のように生活して行きたいと思っています。

白金霞 3月号 (通巻第八五号) 平成三十年三月二十一日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一二九 我孫子市南新木二四二七

☎・fax 〇四一七八七一一〇六八

表紙の題字…加納綾女 同写真は平成二十二年三月四日のお墓場の白金霞